

「敵兵が三十分後にこの地点を通過するもよう」

くそつ、出撃してから四日目だが何度この言葉を聴いたのだ……。しかし今回は、大木が
一帯にあり部隊の全員がそれぞれの木で屈んでいると敵にみつからないだろう。落葉の布
団がむしろ心地いい。このまま敵軍が通り過ぎるまで少し休めそう。各小隊に持たせて
いる機関砲の弾薬の残数も底をつきそう。各兵士が持っている腰くらいまである長身の
ライフルはきつちり手入れができていないために発砲できるか怪しいものだ。それにし
ても軍服が迷彩色でよかった。ジャングル地帯とうまく同化してくれて敵にばれにくい。車
両もすべて放棄しておいてよかった。今あっても邪魔なだけだ。

「佐藤部隊長、中川隊が我が部隊と合流しました」

私の副官である顔はやや丸顔で優しそうな印象の浅田軍曹にそう告げられて私の頭は真っ
白になった。

「B・四一拠点の付近に待機させていた小隊が合流とはそういうことか？」

「はい、B・四一拠点は敵軍に占領され残留部隊全員の戦死が確認されたようです」
その言葉を聴くと出撃前の一瞬に思い出された。

総員集合の合図の喇叭（らっぱ）が聞こえたので私は自分の小隊の点呼を取り集合場所
まで駆け足で向かった。すべての小隊が集まったところで東野中隊長の副官が、
「これより、東野中隊長より重大な話がある！」

この時、中隊の隊員はこれから何の話か察していただろう。数日前にある募集をしていた
のでそのこと以外考えられない。そしてやはり正解だった。

「第五中隊のみんな、今までよくB・四一防衛拠点を守ってくれた。みんなの知ってのとおり、我が天延（てんえん）皇国と敵である宝永（ほうえい）帝国との戦闘が始まって約二
年の月日が立った。この拠点は敵国内で始めて築けた拠点だ。今日で四八二日間我々の手
で守ってきた。しかしその長期間にわたる防衛線により二八一人いた中隊は約半数の死傷
者を出す結果となってしまった。これは指揮官たる私の責任だ。しかしこの拠点を我々が
命を掛けて守ってきたために今では敵領内に多くの拠点を築くことができた。よって私は
このB・四一拠点を放棄し、B・四〇拠点を目指したいと思う。なおこのことは
私の独断であり上に知られると非常にめんどくさいことになる。そのためこの隊は玉砕
したことにしなければならぬ。そこで先日募集した件についてだが、多くの命を守るた
めに私と同じ運命を歩いてもらう。三等親以内に親族の持たない者のみを募集したところ、
条件を無視したものも含め百五十人以上が応募してくれた。本当にありがとう。申し訳な
いが残留部隊はこの中から三十名に絞らせてもらった。今から山本曹長に名前を読み上げ
てもらおう。また合流部隊の編成は後ほど張り出すので確認するように。合流部隊の部隊長
は私の部屋まで来るように。では山本君あとは頼むよ」

山本曹長はまず医兵や工兵の諸連絡をおこなっていた。そんな時、浅田軍曹がこそこそと

私に

「やはり佐藤少尉は応募されたのですか？」

と聞いてきた。

「もちろん、孤児の私にはびつたりの条件だし。それに東野中隊長にはお世話になってい
たから。まあ残留部隊に名前があるだろう」

そんなやり取りをしていると残留部隊員の名前が発表され始めた。しかし予想と違い私は
残留部隊ではなく、合流部隊一分隊をまとめる三小隊を率いる計一六八名の命を預かる
部隊長になっていた。

合流部隊の部隊長としての作戦命令を受け、荷物を片付けるために自分の部屋に向かっ
ている途中で浅田軍曹に声を掛けられた。

「佐藤少尉、般若みたいな顔になっていますよ。それほど難しい作戦なのですか？」

「いや、作戦はこれだよ」

といって私は作戦の書かれた紙を見せた。しかし軍曹は目を伏せて見ようとしな

「どうした？」

「作戦を簡単に他人に見せてはいけませんよ。私はもう少尉の副官ではありませんか
ら」

「何を言っている？ 私は副官を変えるつもりはないよ」

軍曹は率いる部下が増えたために私は副官も階級の高い人間を置くと思ったようだ。まっ
たく、私は浅田軍曹以外の副官は思い浮かばないぞ……。

「浅田軍曹！ 私の副官は君しかない。これは副官として作戦を見る必要がある。これは
上官命令だ」

といって私は無理やり軍曹に見せた。

「最小限の死傷者でB・四〇防衛部隊と合流せよ、ですか……。でもこの作戦で佐藤少尉
が部隊長として選ばれた理由が分かりました。佐藤隊の死傷者が一番少なかったですし」

「私は一六八人もの上に立てる器は持っていないよ。今の小隊長でいっぱいいな
だが……」

そんなことを話していたら通信兵の一人が私のところまで走ってきて

「佐藤少尉！ 外務省外交戦略室室長の九条様より回線がつながっております。通信室まで
お願いします」

「おいおい、軍の回線を私事に使うなよ……。と考えていると浅田軍曹が

「佐藤少尉は外務省の方とご縁があるのですか？ その上、他国との有事を左右する部署の
トップの方とは……」

たしかに軍曹が不審に思うのもわかる。軍人と官僚は交流なんてほとんどない。そもそも
根本的に官僚と軍人は相容れない存在だ。まあ実際に戦っている人間にむかって弾を節約
しろと言われて仲良くできる自信は私にもないが。

「そういえばこの話誰にもしていないなあ。出撃前に私のつまらない昔話を聞いてくれな
いか？ 私の友人として」

「もちろんですとも。では後ほど」

そして私は久しぶりに九条と会話して楽しい時間を過ごした。ほとんどがくだらない雑談だったが。軍回線を私的に使ってもいいものなのか……？

今夜の夕食は出勤前とあってか少し豪華な料理とささやかながら酒の類も出た。夕食後の自由時間に浅田軍曹は律儀に私の部屋に来てくれた。

「佐藤少尉、給仕班からコーヒー豆を貰ってきました。飲みながらお話聞かせていただけますか？」

ということで軍曹にコーヒーを淹れてもらっている間にどんな風に話そうか頭の中を整理していた。

「やはりコーヒーはインスタントより豆の方が香りがいいですね」

と言いながら私にコップを渡してくれた。私はお礼を言い一口飲んだ。たしかにおいしい。

「私の話なんてつまらないものだよ……」

とか言いながら私は話し始めた。私は一人っ子であること。五歳の時に両親が病気で他界したこと。寺に孤児として引き取られたこと。中学進学のとくに自立したくて試験に及第さえすれば最低限の衣食住は支給してくれ授業料が無料である陸軍幼年学校に入学したこと。軍学校の性に会ったのかそのまま陸軍士官学校・陸軍大学校へと進んだこと。その間に九条という大切な友人ができたこと。

「ほら、軍学校の連中ってとくに御国のために命を散らしてこそっていう考えがあるだろ？ 軍曹も陸士卒だから分かんと思うけど。でも私には陸士の頃から一つの信条を持っていて……」

「部下ができれば、部下の命を第一に考えるとかですか？」

さすが私の副官、よく分かっている……。

「まあそれを言うと笑われるのが分かっていたしあまり言わないようにしていたのだけど、ある日ぼろっとお酒の席で言ってしまった。でも九条だけはその話をまじめに聞いてくれてね、それが仲良くなったきっかけなんだ」

「しかしなぜ九条さんは官僚に？ 普通に進めば軍人ですよね」

「ああ、それについては私も驚いたよ。陸軍大学を卒業する一年前に突然言い出したんだ」あの会話は今でも鮮明に覚えている。

「あと一年で卒業だね、佐藤」

「そうだな」

「君覚えているかい？ 僕が外務省の外交担当の役人になればこの国の戦争が減るかもって話」

「ああもちろん。この国は内政があまりよくないからすぐ戦争を仕掛けるのは分かるがな。それでもお前は反戦主義者だし頭もきれるからなんとかしてくれらるだろうよ」

「その話かなえてやろうか？」

「何を言っているんだお前は」

「もし佐藤が主席で大学を卒業したら僕は外務省に入省してあげるよ」

「お前が今つけている主席バッチが私のものになればいいのか？」

「そゆこと。その時は君のつけている次席バッチが僕のものになるだろうね」

「なにがなんでも次席にはなるつもりなんだな……」

「もちろんだよ！ 手は抜かないからね」

「当たり前だ。あとで後悔するなよ」

「とまあ、そんなことがあったんだよ」

軍曹は驚いた表情でみていたが

「しかし九条さんは女性でしたよね？」

と聞いてきた。そうなのだ。私は陸軍大学始まって以来初の女性主席卒と言われてきた人物を邪魔した張本人なのだ。しかしこの戦争中に九条があんな長つたらしい名前のポストについて一ヶ月が過ぎた頃から現場でも終戦のうわさが流れ出した。最前線で戦っているところから終戦のうわさが流れるのは、非常に戦局が悪い時か敵の情報操作のときだけである。戦局はこちらの方がやや良い状況なのでおそらく後者なのだろう。情報操作がきつくなるということはそれだけ平和交渉の話が進んでいるのだろう。やはり私の人選は正解だったのではないか。

「それにしても、佐藤少尉は陸軍大学を首席で卒業して約十年経っていますがいまだに少尉なのですね。出世の早い人はきつと少佐とかで連隊長なんかを任されているのでは」

まったく、普通そんなことを正面立って聞くか？

「前にも言ったが、私は小隊長が一番いいんだよ。それにもう上へのゴマのすり方を忘れてしまったよ」

そんな話もしていたなと思いついている間に敵は私の部隊を素通りしてくれた。

「浅田軍曹、そろそろ動いても大丈夫だろう。小隊長全員をここへ集めてくれ。あと部隊の死傷者の報告はどうなっている？」

「了解しました。また現在の戦死者一五名、重傷者二八名です」

考えていた数より多いな。もつとどうにかできなかつたのだろうか……。

「佐藤少尉が率いているのでこんなに少数ですんでいますよ。いったい何度敵とぶつかりましたか。私の予想ではこの三倍は戦死するものと思っております」

とりあえず、これ以上味方の命は一つたりともやらんぞ。急げばあと半日で拠点に合流できるのだ。それからおそらく最後の命令を伝え部隊は移動を再開した。

ひゅんっ。

私の頭上を一発の弾丸が通り過ぎた。

「て、敵襲——ッ！」

そんなばかな……。普段以上に斥候は出し警戒していた。敵の動きはすべて把握していたはずだ。こんな弾のとどく距離まで接近されて気づかないはずがない。

「佐藤少尉、伏兵のようです。まったく動かなかったので斥候隊も気づかなかったのです。どのように対処しますか？」

まったくもって冷静な副官を持って私は幸せ者だ。もともと私の小隊の死傷率が低かったのも浅田軍曹のおかげといっても過言ではないだろう。

「軍曹、こちらの陣形はまだ鶴翼だろうか？」

「味方を信じてください。この部隊は根性のある者ばかりです」

まったく、少し頭に血が昇っていたようだ。情けない……。

「現在、非戦闘中の分隊の数と場所は？」

「左翼後方の三隊だけです」

とにかく最善の手をこの瞬間に考える。くそっ、部隊長は現場を直に見れないから嫌なんだ。

「分かった。現在戦闘中の各分隊に伝令！『今立っているその場所を三十分間死守するように。すべての弾薬を使い切ってもかまわない。ただし戦死は許さない。死ぬことは軍令違反とする』」

「非戦闘中の隊に関しては？」

「三隊の指揮権を一時私に委任してもらい反撃の機に突撃する」

その時の浅田軍曹の驚いた顔は一生忘れないだろう。

五年後。

私の最後の作戦は成功し、敵軍を追っ払ったあと小一時間程でB・四〇拠点に合流を果たした。五日間の行軍で戦死者十九名、重傷者三十六名だった。ちなみにその六五日後に両国の講和条約が結ばれ終戦した。

「お久しぶりです。佐藤少尉も東野中隊長のお墓参りですか？」

「おっ、まったく気づかなかったぞ。それにしても久しぶりだなー。というよりなに言っただ、私は退官した身だぞ。浅田軍曹も……」

そこまで言っただけで浅田の階級バッチを見て絶句した。

「ちゅ、中尉どの……」

私は久しぶりに敬礼していた。長いブランクがあるのにやはり軍人根性は抜けないらしい。上官には敬礼してしまう。浅田も敬礼を返しながら

「ハハハ、気づいたら思った以上に出世してしまいました。今は新兵の教育係をしています。それに佐藤さんはもう退官されたのですからあの頃のように接してください」

いや、それにしても驚いた。まさか中隊長の命日に自分の階級を抜かれたかつての副官に出会うとは……。

「佐藤さんはあの後、中学校の先生をされているのですよね？」

そうなのだ。あの戦争から帰ってきた時、お世話になっていた寺の和尚に中学校で軍事教練科の教諭を募集していると聞いて応募したのだ。いやそれにしても、大学で暇つぶしに

取っていた教職課程にこんなところで役に立つとは思わなかった。ちなみに今年からは担任も任せてもらっている。そんな話をしていると足音が一つ聞こえてきた。

「九条！ 本当に久しぶりだな。お前も東野中隊長の墓参りか？」

「久しぶり。そりやお世話になった東野教官だからね。元気な姿を見せておかないとおこられるよ」

たしかに。東野中隊長は特に九条がお気に入りだった。

「はじめまして。私は先の戦争で佐藤さんの副官を勤めさせていただきました浅田と申します。失礼ながら、九条さんと東野中隊長はどのような関係なのですか？」

「ほー、はじめまして。浅田君の話は聞いていますよ。東野教官は佐藤と僕の大学時代の先生だったんだよ。防衛拠点の指揮（実践）の授業は面白かったね。佐藤」

ふんっ、私はあの授業二度落としたがな。あれほど単位の取りにくい必修科目もなかったよ……。それでもあの小柄で四角い顔の大笑いとみるともうちよっと頑張るかと思ってしまう。

「しかし、大学で教鞭を振るっていた方がなぜ中隊長をなさっていたのでしょうか？ 本来は旅団長クラスの指揮にまわされますよね」

「どこかの誰かさんと同じく大人数の指揮は私には合わんと言っただけを希望したそうだよ。まあ上としてもあそここの拠点は能力のある人間に就かせたかっただろうからちよほどよかったのだと思うよ」

この話を聞き私は顔を上げられなくなった、九条よ、いらぬことを言ってくれるな……。そんな話をしている間に東野中隊長の墓をきれいにし花と線香に中隊長の好物だったみたらし団子を供え終わったので三人で手をあわせた。顔を上げたとき九条には言うまいと思っていた言葉を言ってしまった。

「たのむから私の教え子たちを戦場に送ってくれらんじやないぞ」

そういうと心配そうな顔をして浅田が聞いてきた。

「佐藤さんはもう軍はお嫌いですか？」

「まさか。もちろん軍人が嫌いになっただけではないよ。あのとても分かりやすい上下関係はとても居心地がよかった。それに多くの国民の方々の役に立ってるんだぞ。有事の時はもちろんだが、災害の時にも頼りにされるんだ。こんなにやりがいのある仕事もなかったよ。多くの国民の方々の命を守っているのだという誇りもあつたな。確かにあまり内政がいいとは言えない天延皇国だが、私の祖国だ。私は自分の国が好きだよ。その国で少しでも役に立ってる場所をもらったのが軍だから。確かに友人を何人も戦争で失ったから複雑な気分になるときもあるが……」

これが私の本当の想いだ。戦争はよくないが有事の際私たちがたたかわないと日々訓練している意味がない。でもそれは別にしていま、赴任している中学は本当にいいところだ。あの子達が私のような戦場に立つかもと考えると本当に恐ろしい。軍事教練科目を教えている私がこんなこと言えるわけじゃないがそれでもあんな想いは決して欲しくない。しかしこれを九条に言っても苦しめるだけだ。九条が外交のトップにいるとしても一存ですべて決めれるわけではない。戦争で甘い汁が吸える人間がいることも事実なのだ。足の引つ張り合いの激しい部署であろう事は間違いない。それでも九条は微笑みながら

「もちろんだよ。でないと僕は軍人をあきらめた意味がないよ。僕は佐藤と違って出世街

道まっしぐらだったはずだし。でも僕は後悔していないよ。むしろ佐藤には感謝しているくらいだよ。人の命をこんなところでも救えるのだから」

「それにもし事が起こっても戦場で死なないように死ぬくらい鍛えてやりませよ」
さすが新兵教育係、頼りになる。そんな話をしている間、私はふと気づいた。今ここにいる三人はすぐく不思議な人間関係であるということ。一人は文官として平和のために走り回っている。一人は武官として有事の際は最前線に送られる兵を死なさないために訓練に明け暮れている。そして私は国の宝の教育にかかわっている。

「佐藤、悪いけど僕の最終目標は中・高・大学生の軍事教練科目の廃止だからね。せめて軍学校以外の学生は勉強に専念して欲しいよ」

それは私も思う。そしてその話はずいぶん実現させて欲しい。

「じゃあ、私は職がなくなる前に社会科の免許でもとるかな」

私が考えるに、戦争の多いこの国でこんな考えの人間が増えるということが平和への第一歩ではなからうか。

「そう言えば、佐藤は結婚しないの？ もうとっくに三十路も過ぎちゃったけど」

「うるさい、お前も私と同じじゃないか。この中でちゃんと家庭を築いているのは浅田だけだぞ……」

「え、浅田君そうなの？」

「はい、息子が一人と娘が二人います」

「うーん、僕達はまず伴侶をもらうところからだね」

「まったくだ。ん、浅田なにそんなにじろじろ二人をみているんだ？」

「お二人はご自分の近くに最高の伴侶がいると思えますが……」

「誰のこと(だ)？」

そう私と九条は声を合わせて聞いたが、浅田は苦虫を噛み潰したような顔をするだけで答えてくれなかった。

自然災害になすすべもなく見ているだけの弱い人類が戦争やテロといったくだらない行動でさらに破滅の道を歩んでいかないことを心から願います。

おわり